私と蒼の物語

月姫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここはとある山の中。

江戸時代には小さな村があったが、今では祖父の遺産を受け継いだ私しか住んでいない寂れた山奥。

仕事に疲れた私はこの寂れた山の中に一軒家を立てて私は住んでいた。

ある日私は祖母から教わった童話を歌う子供の声を聞く。

そして私は数奇な運命に弄ばれることになった。

数百年ぶりの眠りから覚め、久しぶりの人間に歓喜して私にとても懐いた山神様。

そして私はある重大な秘密を知ってしまう……。

これは仕事に疲れ、山奥に引きこもった私と、『童話集　蒼　』に伝わる山神様との交流を書き綴った物語。

仕事に疲れた、少々人間嫌いの主人公五十鈴薫と、童歌で伝わる山

神様（ボクっ娘ロリ）のほのぼのストーリー（予定）
ガールズラブは保険です。

※特に完結する予定はありません、気が向いた時に書いていく予定です。

次話に生かすために批評絶賛募集中です。
分かりにくい点、誤字脱字、足りてないタグ等がありましたらお気軽にどうぞ。

小説家になろうでも投稿中です。

目　次

私と可愛い山神様
この日、私の物語は始まった。（プロローグ）――――1
私は空耳と思わしき声を聞く。（第一話）――――4
私は山の神に会う。（第二話）――――7

私と可愛い山神様

この日、私の物語は始まった。（プロローグ）

ある日の朝、私は窓の外から聞こえる喧しい子供の歌声で目を覚ました。

私は眠気から、童歌を歌う子供の声に舌打ちをして布団から出ると、二度寝の誘惑と戦いながら寝巻きから着替え、洗面所に顔を洗いに行った。

その時の私は、何故窓の外から話し声が聞こえたことを不自然に思わなかったのだろうか？

私の家があるのは私以外に誰も住んでいない山の中、話し声が聞こえるなんて有り得るわけが無いのに。

疑問すら覚えずに、どうにか二度寝への誘惑と戦いながら顔を洗い終えた私はこの平成のご時世では珍しい…と言うか古臭い薪と釜を使って昨日の夜に炊いたご飯をおにぎりにし、太陽光パネルを使って供給される電気を使った冷蔵庫から漬物を取り出して朝食を取り始める。

今の話の流れでだいたいわかると思うが、ここはテレビの電波どころか、水道やガス、電気すら通っていないクソ田舎である。

数ヶ月前の私は、電気が無い所には絶対に住みたくないと思っていたが今ではそこまで不便ではない。

最も電気が欲しかった理由は仕事のパソコンに使うためだが。

私は少し前に死んだ祖父母の遺言でここ周辺の山をもらった。

私の家系は遡るとそこそこ上流だったらしい。

一流大学を出て一流企業に就職し、そこそこ上まで登ったところで色々あって仕事に疲れた私はこの山をもらった瞬間、必要最低限の電気を供給するためのソーラーパネルを取り付けた家を建て、引きこもった。

そして私はこの山奥で毎日のんびりと過ごしている。

とりあえず朝食を食べ終えたので食器を洗うために井戸で水を組むことにしよう。

……気づかないなぁ…

もう人間は僕のこと忘れちゃったのかなぁ…？

気がついてくれるように人間達に伝わる僕の歌を歌ってあげたのに…

あぁ……悲しい…昔はみんな僕を畏れてくれたのに……あんなに貢物もくれたのに……

だから僕は人間達に力をあげたのに……

あのお姉ちゃんなら気づいてくれると思ったのに……

巫女の家系のあのお姉ちゃんなら気がついてくれると思ったのに……

あぁ…こんな事なら数百年も眠らなきゃよかった……

ここは山神様のお膝下、子供が野犬を追いかけ走り出す。
それ見て慌てて親が言う、「犬を虐めると山神様に祟られる。」
聞かずに子供が野犬を捕まえた、すると突然大豪雨。
子供は慌てて犬を離す、親も慌てて念仏を。
すると空は晴れ渡り、野犬はさっさと逃げ出した。
（童話集　蒼より一部抜擢　　山神様と野犬　　）

蒼、それはこの地域に伝わる民間伝承を纏めた童話集。
面白いけどちょっぴり怖い童歌集。
けれど…それが真実だと知る人は既に誰も居ない。

そして私はこの家が、『童話集　蒼』で語られる、山神様のお膝下である事などこの時点では知るはずもなかった。

私は空耳と思わしき声を聞く。（第一話）

井戸で水をくみ、食器と釜を洗い終えた私は布団を干すために部屋へと向かった。
布団を庭に運び、物干し竿で干しながら私は過去を思い返す。

私は生まれた時に母を無くし、父親が1人で私のことを育てた。
父は私を育てるために私を母方の祖父母（父方の祖父母は既に鬼籍に入っている）に預け、必死に働きいていた。
私はそんな父の背中を見て育ち、子供の頃から父親に楽をさせたくて勉強をしてきた。
小学生の頃から塾に通い、地元の私立中学に入学。
そして中学卒業と同時に東京の進学校に入学し、そのまま某有名大学へと進学。
大学卒業後は某大手製薬会社に務める。
別に父が私に、「進学しろ」だの、「大手企業に入れ」だの言った訳では無い。
父は私にいつも一言、「母親の分まで生きろ。」そう言っていた。
私が就職してから5年が立った時に父が亡くなった。
原因は麻薬中毒者の暴走運転による交通事故だった。
それから2年後、幼い私の面倒を見てくれた母方の祖父が、その一月後に祖母が亡くなった。
二人とも癌だった。
こうして私は働く理由を失い、仕事を辞めて祖父の遺産の山に引っ越すことにした。
（ちなみに父や祖父母への仕送りは一銭も使われておらず、父と祖父母の遺言状にはその全てを私に譲渡すると書かれていた。）
上司と同僚、後輩に会社を辞める旨を伝えると皆残念がっていたが、私の意志が固いことを知ると笑顔で送り出してくれた。
同僚や上司、後輩とは今でも手紙をやり取りする仲だ。
ちなみにそれが4ヶ月前の出来事。

そしてこの私、五十鈴薫は退職金と使われていなかった仕送りを使って悠々自適な独り身独身ライフをこの地で送っている。

「ふぅ……ここに住み始めて4ヶ月前も経つけど布団を干すのは疲れるわね…」

この歳で疲れるのはおかしいと言うかもしれないが、あいにく中高大と私は文化部だ。

これが運動部だったらここまで疲れてなかったのかもしれないが、どの道製薬会社勤務なのであまり変わらなかったかもしれない。

ちなみに布団を干し終えた私は特になんの予定も無く、のんびりと部屋で本を読むだけである。

これで私が結婚をしていたらもっとやることがあるのだろうが残念ながら私は独身だ。

顔は悪くないと思うので相手を探せば結婚出来る気はするが、おそらく私は一生独身を貫くだろう。

何故かって？友達付き合いをするだけでも疲れるのに結婚したらもっと疲れるでしょ？

まあそんなことはどうでも良いのでとりあえず家の中に入ろう。

春とはいえまだ外は寒い。

そして私が家の中に入ろうとすると…

「ねえ…聞こえるお姉ちゃん……？」

……空耳だろうか？

今私の耳に子供と思わしき年齢の声が聞こえた。

しかし辺りを見ても誰もいない。

「……私、この年で耳の病気かしら？……後で病院行きましょ…」

私は空耳だと思い、家の中に入ってしまった。

玄関の横にいた、半透明の少女の姿に気がつくことが無く……

「僕の姿は見えないみたいだけど、声は聞こえたんだ…嬉しいな……。」

風が吹き、桜の花びらが散った。

私は山の神に会う。（第二話）

「あー疲れたぁ……なんで布団ってあんなに重いのかしら…？」
いつか１００ｇしかない布団とか誰か作ってくれないかしら？

私は家の中に入ると一目散に二階にある、自分の部屋のソファに座り込んだ。
アラサーにとって布団運びは重労働なのだ。
「確か…昨日は荀子を読んだ筈だったわよね……？」
私は本棚から本を取り出す。
今日は孫子でも読んでみることにしよう。
私の中では思想書ブームが来ていているのだ。
「……」
私が本を読み初めてから小一時間ほど経った所で、

「お姉ちゃん……聞こえる…？こっちだよ……」

また、声が聞こえた。
「また幻聴が…本格的に病院に行った方が良いのかも……」
声がした気がする方を見ても私の服が入ったタンスしかない。
もしかして私は前の職場で違法な薬の人体実験の被検体にでもされていたのだろうか？

「こっちに来てよ……お姉ちゃん…」

ヤバい、これはヤバい幻聴に私の事を呼ばれた。
これがどれくらいヤバいかと言うと、マ○ドの店内で「モス○ーガーの方が１００倍美味いな！」って叫んだ時と同じくらいヤバい。
……コホン、落ち着きましょう私。
これは空耳よ空耳……間違っても加齢による難聴とかじゃないわ。
というかこの歳で難聴だとか思いたくない。

「お姉ちゃん…聞こえてるでしょ……？」
「あーもうさっきから何ようっさいわね！」
　しまった、つい空耳に返事を…。
　これ他人から見たら突然見えない何かに怒鳴るアラサー女よね？
「良かった、聞こえてたんだね…」
　しかも幻聴が返事を返してきた。
　これがアレかしら、イマジナリーなんとかって奴？
　……もしそうならアレね、なんかとってもアレな気分だわ、
　具体的に言うとクソ。
「こっちだよ、こっちを見てよ…」
　とりあえず声がする方を見てみようかしら？
　見たら黙るかもしれないし
「何よ、タンスしかないじゃないのよ。」
「こっちだってば…」
　タンスの上をよーく見つめると、置いた記憶のない小さな日本人形がある。
　……まさかコレじゃないわよね？一応聞くだけ聞いてみましょうか…
「もしかして……さっきから声を出してるのは貴方？」
「そうだよ！やっと気づいてくれたんだね！」
　小さな女の子を象った人形が私に話しかけてきた。
　……夢よね？
「……からくり人形かしら？」
「違うよ！僕はこの土地の……まあ、神様…みたいなものかな？」
「何よそれ、なんで自分のことなのにハッキリ断言しないのよ」
　ちなみに私はハッキリしない人間が嫌いである。
「えっと…それは……ちょっと事情がありまして……」
「何よそれ、まあなんでも良いけど……で？さっきからなんで私を呼んでたのよ」
「それは……」
「……はぁ、まあなんでも良いわ。

とりあえず私が本を読み終わるまで邪魔しないでね？」
自称神様が何か言ってるけど私は気にせず本を読むことにした。